

主体から眺める「ひきこもり」経験

——欲望における他者の模倣とモデルの不在——

関西学院大学 伊藤康貴

目的と方法：「ひきこもり」の当事者の語りにおいては、親や家族、あるいは同世代の人間と自己とを比較したうえで、自己が劣位にあると認識し苦悶する、あるいは劣等感を覚えるという事態がしばしば見受けられる。本報告ではこの「劣等感」に着目し、ルネ・ジラルールらの欲望の三角形理論を下敷きに議論する。

周知のとおりジラルールは、セルバンテスの『ドン・キホーテ』からドストエフスキーの諸著作までの近代小説を分析することを通じて、人々の欲望のメカニズムを提示した（Girard 1961＝1971）。彼は欲望という現象を、欲望の主体と客体の二者関係ではなく、欲望の主体と欲望の媒体、欲望の客体の三角形の関係において生じるものとして理論化したわけである。また作田啓一は、このジラルールの着想を取り入れ、日本における近代小説を批評する一方で、人々の「欲望」や「嫉妬」などを分析する理論枠組みとしても活用していた（作田 1981 など）。

これらの研究を参考に本報告では、かつて引きこもっていた私自身が劣等感に関して記述していたエピソード（伊藤 2017）を呼び水に、「ひきこもり」の経験を社会的に考察する。

考察：欲望の主体としての「ひきこもり」の当事者は、親やきょうだいを模倣しようとし、また同世代の人間たちを模倣しようとする。それぞれの欲望の媒体は主体にとってモデル＝ライバルとして立ち現れるが、主体自身の認識や社会の構造変動において、親やきょうだいを模倣することが困難な状況になることがある。また日本においては、メンバーシップ主義のもとで、いったん組織から離れた主体が再び組織に正規メンバーとして参入することは比較的困難である。加えて組織におけるモデルは単一化されている場合が多いため、モデルを模倣できない主体は組織からの離脱を余儀なくされる。

ゆえに主体は、自らが模倣したいモデルが見いだせず、欲望それ自体が枯渇する感覚に陥ることもありうる。「ひきこもり」の当事者がしばしば口にする「どう生きたらいいかわからない」という発言は、自分にとってのモデルを失い途方に暮れている心情を吐露しているとも解釈できる。たとえ「社会復帰」を目指したとしても、主体は媒体に対して常に遅れているため劣等感を感じざるを得ず、媒体に追いつこうと補償努力に巻き込まれることになる。一方で、近年活発化している「ひきこもり当事者活動」の実践者は、「社会復帰」に代わる「新しい生き方」を標榜し、自身を「ひきこもり当事者」と自己呈示することを通じて、内的媒介者として主体の方へ近づいていく。主体からは、彼らは欲望の模倣を働きかける存在として認識され、主体はその生き方に魅了されつつも、媒体との距離の近さゆえに劣等感を抱くことにもなる。

結論：主体は、自らの状況における選択可能なモデルのなかから、自らが模倣したいモデルを、リスクをも含めて再帰的に引き受けることになる。支配的な価値に適合的なモデルへの方向は、様々な支援メニューが存在するものの、主体の補償努力は永続的となる。「新しい生き方」への方向は、確固たるモデルが存在せず、主体は手探りで自らの生き方を探ることとなる。

文献：

- Girard, R., 1961, *Mensonge romantique et vérité romanesque*, Paris: Bernard Grasset. (=1971, 古田幸男訳『欲望の現象学——ロマンティックの虚像とロマネスクの真実』法政大学出版局。)
- 伊藤康貴, 2017, 「『ひきこもり当事者』の社会学的研究——主体から問う『ひきこもり』と社会」関西学院大学大学院社会科学研究所博士論文。
- 作田啓一, 1981, 『個人主義の運命——近代小説と社会学』岩波書店。